

学級・学年単位の団体応募には、
《特典》として

ご応募
いただいた
生徒の皆様
全員に

新潮文庫
「特製グッズ」を、
もれなく進呈！

団体応募の際は、学校名・所在地・電話番号・ご担当の先生のお名前・
作品総数を必ず未開封の状態を確認できる場所に明記の上、一括してお送りください。
(特典の「特製グッズ」は大賞の発表後に、ご担当の先生宛に一括発送いたします)

新潮文庫

- 【概要】**対象図書の中から心に深く残った「一行」を選び、なぜその一行を選んだのかを100～400字で自由に書いてください。
- あらすじの紹介や、作品を解説するような読書感想文ではなく、できるだけご自分の「想い」や「エピソード」を書いてください。
- ※ここでいう「一行」は、字義通りの一行ではなく、「一文」もしくは「ひとつかたまりの意味をもった言葉の連なり」という意味です。

氏名・年齢・学校名・学年、対象図書名と選んだ「一行」の掲載ページを別途必ず明記してください。

- 【対象図書】**2024年「中学生に読んでほしい30冊」「高校生に読んでほしい50冊」「新潮文庫の100冊」選定作品

※「新潮文庫の100冊」選定作品は「新潮文庫の100冊」ホームページ <https://100satsu.com>で2024年7月2日に発表します。

- 【締切】**2024年10月1日(当日消印有効)

- 【発表】**受賞作品は「波」2025年1月号(2024年12月27日発売予定)と新潮社ホームページにて、発表時に全文を掲載します。
- 大賞作品は次年度の「中学生に読んでほしい30冊」「高校生に読んでほしい50冊」に掲載します。

- 【賞品】**大賞:1名、優秀賞・佳作:数名に、賞状と図書カードを贈呈。

- 【宛先】**郵便:〒162-8711 東京都新宿区矢来町71 新潮文庫ワタシの一行大賞係
Eメール: ichigyo@shinchosha.co.jp

作品総数を、未開封の状態を確認できる場所に必ず明記してください。

- ※応募原稿は返却いたしません。
- ※応募は何作でも受け付けますが、一人名についておひとりで複数のエッセイを応募することはできません。
- ※二次審査通過作品の発表時にホームページ上で氏名、学校名を掲載させていただきます。ご了承ください。
- ※応募原稿に記入いただいた個人情報、選考・結果の発表以外には許可なく使用いたしません。
- ※団体応募時には個人々の生徒の連絡先の記載は不要です。

本は苦手だ。難しそうなことが書いてある。

「作者の言いたいこと」も

「登場人物の気持ち」もよくわからない。

でもなぜか、ときどき気になる一行がある。

その一行で、元気づけられたり、ほっとしたり、ドキッとしたり。

その一行で、怖くなったり、寂しくなったり、泣きたくなったり。

その一行で、友だちに会いたくなったり、

部活頑張ろうと思ったり、家族にありがとうと言いたくなったり、

誰かに大好きと伝えたくなったり。

どんな一行でもいい。

あなたが見つけた一行を、あなただけの一行を

あなたの気持ちといっしょに教えてください。

ワタシの一行大賞選考委員会

いい感想文を書くという作業は、
実はとても難しいものです。

でも「一行を選びだす」

という入り口をつくることで、

ただの本のまとめではなく、

より個性のある感想文を

書きやすくなります。

そんな思いから、

新潮文庫ワタシの一行大賞は
生まれました。

受賞作品は全文が、

月刊誌「波」と、

新潮社のホームページに

掲載されます。

あなたの心に

深く跡を残した一行の

ご応募をお待ちしています。

株式会社 新潮社

ワタシの一行大賞選考委員会

新潮文庫

第12回

中高生のための

ワタシの一行大賞

「新潮文庫ワタシの一行大賞」は、好きな一冊から、気になった「一行」を選び、

その一行に関する「想い」や「エピソード」を記述する、新しいかたちの読書エッセイコンクールです。

ワタシの一行大賞 応募例

あなたの心に深く残った「一行」

「一行」を選んだ「想い」や「エピソード」

氏名・年齢・学校名・学年、
対象図書名と選んだ「一行」の掲載ページ

おなかが空いたってまずしくたって、人は本を必要とする。

私の絵本がなくなった。震災で家を失った、小さな子どもがいる家族に母親が送ったのだ。幼い時に母が何度も読み聞かせてくれた、一番お気に入り絵本の絵本だったので、私は怒った。「インターネットで支援を求めている家族に、食料や着られなくなった洋服を送るね」としか聞いていなかった。会ったこともない人たちに、頼まれてもいないのになんで、という母親は「ごめん」と謝った。

けれど、よく考えれば、母にとって一番お気に入りの絵本だったのだ。母はきっと、何もかもを失ってしまったその家族にとって、必要なものだと思ったのだろう。この一行に、母の気持ちが届まっているような気がした。

新潮花子 17歳 東京都立新潮高校二年
角田光代「さがしもの」(128ページ)